

年間第28主日

マタイ 22・1-14

2020.10.11

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 うめざき たかいち 梅崎 隆一神父

「町の大通りに出て、見かけた人は誰でも婚宴に連れてきなさい」（マタイ 22・9）。

婚宴の席に参加することができる人の条件は、「王の家来に呼ばれた」というただそれだけあり、善人であることが条件とはなっていないので、悪人もやってきます。ところが婚宴の席に呼ばれた人が、礼服が無いからと追い出されているというところで緊張感が走ります。悪人であるから追い出されましたなら納得しやすいのですが、礼服が無いから追い出される。しかも道端で呼ばれたのだから、礼服など身に着けているはずはない。それなのに礼服を求められる。それは一体どういうことなのでしょう。

この福音の中で王が追い出した人に語った言葉は「友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか」（マタイ 22・12）でした。マタイ福音書の中で「友よ」と呼ばれている人は、イスカリオテのユダでした。イエスがユダに「友よ」と語ったシチュエーションは、長老、祭司長が遣わした剣や棒を持って武装した群衆をユダが引き連れてやって来たときでした。そんなユダに対して「友よ、しようとしていることをするがよい」（マタイ 26・50）と言っています。ここから礼服を着ていない人とユダの関連が見えてくる。やがてユダはイエスが有罪となったことを後悔しましたが（マタイ 27・3）、首をつって死んでしまいます。

礼服を着ていないことから外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするとありますが、大きな後悔を感じさせます。結末が外の暗闇に追い出されるというたとえ話については、マタイの福音書のいたるところにあります。主人から1タラントンを預かって土の中に埋めていた人が「役に立たない僕」として外の暗闇に放り出されていて、「そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」とも言われています（マタイ 25・24-30）。10人のうちの5人の乙女はともし火と一緒に油の用意をしていなかったため、婚宴の席に入ることができなかった（マタイ 25・1-11）という話もあります。他にも、主人が出かけている間に、主人の財産を預かっていて、主人の言われたとおりにしているのを見られたら

僕は幸いであるのですが、その僕は主人の帰って来るのが遅いと思い、仲間を殴り、酒飲みどもと食べたり飲んだりしていると、主人は予想しない時に帰って来て、彼を厳しく罰した（マタイ 24・46-51）という話もあります。

ここから分かってくるのは、罪人だからという理由で神の国に招かれないということではなく、すべての人は招かれています。しかし神の救いの計画を受け入れないなら、滅びを自分自身に招くことになるということです。

毒麦のたとえ話の中では、毒麦である不法な者どもを集めて、燃え盛る火で焼かれる（マタイ 13・37-42）、それから、良い木は良い実をつけて、悪い木は悪い実をつける（マタイ 12・33）という話もあります。こういった聖書の箇所を読みながら感じるのは、人は神に似せて造られているのだから良い木であり、良い実りであるけれど、神から離れてしまうなら毒麦となり悪い木となると考えられます。

パウロは、神の前に義人は一人もいない（ローマ 3・20）と言いますから、わたしたちはわたしたちの力で、婚宴の席に行く権利など持ち合わせておらず、ただ神に呼ばれなければ、永遠の命を味わうことも、ふさわしい実りを実らせることなどできません。人間は神に似せて造られたのだからどの人も素晴らしい存在なのに、神から離れることから非人間的な現実が引き起こされます。神様の前で「俺は善い人だからこの食卓に入って食べる権利があるんだ」と言える人は一人もいません。わたしたちが今日この食卓で食べることができるのは、神様に呼ばれるからただそれだけであり、神様に呼ばれずして、自分の力で「俺は義人だから食べる資格があるんだ」と言える人は一人もいません。

人が神の前に義人になるためには、たった一つの方法しかない。それは信仰であるとパウロはローマの信徒への手紙の中で書いています。（ローマ 3・28-30）ですから、マルチン・ルターは、この「礼服」というのは信仰のことではないかと考えたようで、確かにそうだと思います。わたしたちは信仰によって義とされなければ、なんぴとも主の食卓を食べる資格はありません。ですから「わたしはあのような徴税人でないことを感謝します」と祈っているなら、主の食卓を味わうことはできません。むしろ「罪人であるわたしを憐れんでください」と祈ることができる人がむしろ義とされて帰った（ルカ 18・10-14）とありますから、わたしたちは自分が正しいと思っているうちは本当の意味で主の食卓を味わうことはできず、自分の弱さを知り、救う力は神にしかないと信じる者でなければ食卓の意味が理解できません。この世の賢さに比べれば愚かにしか聞こえないイエスの言葉ではなく、この世の賢さに耳を傾ける人というのは、人祖が始めて以

来の人間の弱さに共通するものですから、そういう意味でもわたしたちは神の言葉を聞くよりもこの世の言葉に耳を傾けるという弱さをいつも持っています。

わたしたちはいつも神様の食卓に招かれています。神の食卓を断って、畑や商売の方を優先させた人々のように、神以外の別の招きを優先させるようなことをしてはいないでしょうか？神の食卓に招かれているのに信仰という礼服を忘れ、ご聖体をいつかは朽ちてしまうパンだと考えて、ご聖体を食べた自分のことばと行いが人の命を破滅に追い込むようなことにはなっていないでしょうか。

今は神の救いよりも人間の作り出した科学技術を優先させる時代となりましたが、その技術によって人類が滅びに向かう可能性もあります。人間の力ではどう頑張ってもわたしたちは救われません。ノーベル賞級の発見や発明があっても、それは悪用される可能性はあります。世界の指導者も、神の呼びかけよりも、領土を意味する畑や、商売を意味するような貿易戦争による国益重視のほうに関心をもって、場合によっては武力を使うことで自らの滅びを招いていく。そういった姿が、神の呼びかけに対して否定した人たちのあり方であると、今日の福音は語っているように感じます。

自分の命を愛する人はそれを失い、自分の命を惜しまぬ人はそれを保つ（ヨハネ 12・25）とも書かれています。人間の力ではなく、ただ神の招きに耳を傾け、聖霊と共に父の御心をこの世界の中で行う者となり、信仰によって義とされたわたしたちは、この婚礼の儀において、永遠の命であるイエスの体を深く味わうことができますよう、共に祈りましょう。